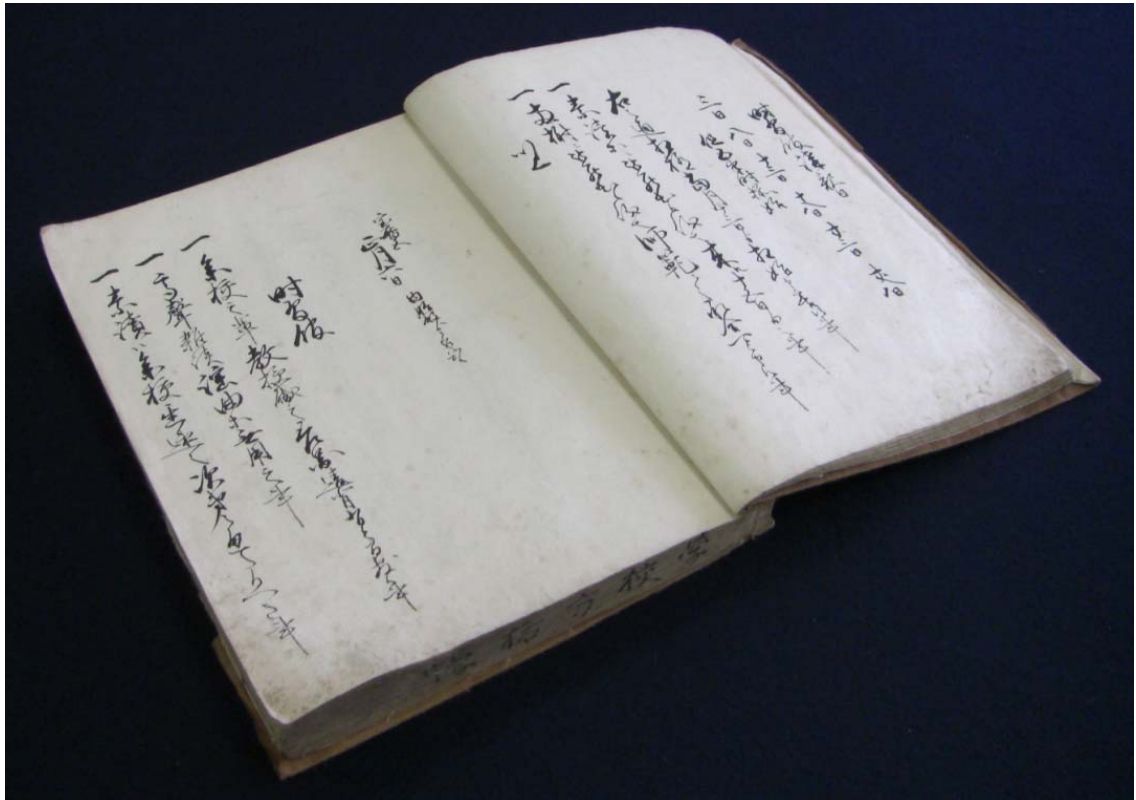


# 学校方格帳

熊本大学附属図書館



『学校方格帳』 財団法人永青文庫所蔵 熊本大学附属図書館寄託

本書は、財団法人永青文庫所蔵、熊本大学附属図書館寄託資料『学校方格帳』を翻刻したものである。  
この資料は、宝暦四年（一七五四）十月十五日学寮設置命以降、幕末まで学政を掌る学校方へ出された規則の通達を記録したもので、  
学校の名称・学生・教育内容・教育方法等の他、学校敷地・学校経営すべてにわたっている。

一 原資料について

資料名 『学校方格帳』（がっこうかたかくちょう）

請求番号 108.6.63-7

大きさ 縦 31cm 横 22.5cm

本文 105丁

一 翻刻作業について

熊本大学附属図書館古文書勉強会（\*）で行った。

翻刻作業期間 平成十六年二月三日（火）～平成十七年十月十八日（火）

一 データ入力作業について

WORDを使用して入力した。

入力作業期間 平成十八年一月～平成二十年八月

一 データ編集について

編集作業期間 平成二十年八月～平成二十年九月

## 凡例

一 データ入力・編集にあたっては、できるだけ原資料の体裁に従った。

- ・ 行替えは、原文の通りとした。
- ・ 原文が、朱筆の部分は赤字で表記した。
- ・ 付札は、(付札)「」と表記した。但し、本文中に 付紙 と記載されたものは「」なしで表記した。
- ・ 本文中の文字で二行書きなど小さい文字の場合は、原文の体裁に従い、フォントを下げた表記した。
- ・ 付札の文、行間文はフォントを下げた表記した。

一 用語の取扱いは以下の通りとした。

- ・ 以下の漢字は原文の通り表記した。  
禮 藝 処 處 臺 躰 扣 聲 僉 など
- ・ 変体仮名は現行のひらがなに改めたが、以下のものはそのままとした。  
二 而 之 江 茂 者
- ・ 助詞として使用されている「二 而 江 茂 者」は、フォントを下げた表記した。

一 解説不明の文字は、□で表記した。

### \*古文書勉強会

図書館職員有志による勉強会。川口恭子客員教授指導のもと、大学の休業期間を除いて、毎月二回、第一・第三火曜日の夜、勉強会を行っている。

翻刻作業時のメンバー(五十音順) 大倉桂 岡崎絹子 川内野祐子 北野典子 後藤友紀

坂崎直美 田川登紀子 永村典子 浜崎千雅 樋口文子

# 学校方格帳

宝曆四年十月十五日

一 今度学寮被仰出候段三洲志津摩殿より達相成候事  
今日被仰出候

覚

一時習館兩榭ニ罷出候儀ニ付被

仰出候御書附相渡候来正月より被罷出筈候事

一時習館ニ罷出候面々日々出席之筈候得共秀才輩  
居寮仕度相願候得者相応ニ御扶持方被下

居寮茂被仰付筈候事  
右之趣を以組く支配くニ茂可被申渡候事

宝曆四  
十二月十五日

今度申付候稽古場之儀学寮者時習館

武藝所者東榭西榭と可称候

一 知行取之子弟中小姓之嫡子凡士席以上者

大小身之無差別時習館及兩榭ニ可罷出候尤

心懸次第自身茂可罷出候

一 輕輩陪臣たり共拔群之者内膳承届罷出候様ニ

申付候

農商茂右同断

右之外委細者内膳より可申聞候事

十二月

右之通助右衛門殿被仰渡頭々江右御書付被相渡候

事

同日内膳殿より頭々江御渡候書付

覚

時習館兩榭ニ被罷出候儀付而者今度被  
仰出候通ニ教育之儀等為心得申達候

一 素読之事  
一 書学之事

但雅俗之躰者父兄之存寄ニ応シ手本等者  
持参候とも勝手次第

一 太刀折紙其外器物之請取渡之事

右者八九歳以上十四歳迄之子弟習せ申筈

其上ニ而甄別教育之次第及差凶筈之事

一 十五歳以上たり共初学輩者右ニ準シ可申候事

一 算学之事

但若輩成人共其身ニ随習せ申筈

一 時習館ニ罷出候輩者儒官之内之門人ニ成可被罷出候

但只今迄之門人者被改候ニ不及候此以後新ニ

門人成之衆者其師ニ筆紙墨扇子之内

何連ニ而茂一品為祝儀可被相贈候右之外

付届之儀存寄次第之事候得共禄之多少ニ

応し過分無之様ニ可被心得候

一 成人之輩会読等ニ被罷出候儀者儒官門人之

外たり共勝手次第尤前以儒官之内ニ可被申入候事

一 講釈日ニ被罷出候輩茂右同断

一 兩榭ニ被罷出候者十五歳以上之事

但十五歳未至候共成長次第被相達候趣ニ応し  
入射之可及沙汰候事

一 馬乘形之事

但若輩成人共ニ未熟之輩者木馬ニ而習申筈

左候而見合於追廻馬場稽古任せ候筈之事

一 此以後武藝之師ニ門弟成有之衆者其節為祝儀

扇子紙之内一品可被相贈候

但只今迄門弟者被改候ニ不及此以後門人成  
之衆者本行之通ニ被相心得員数等者儒官

門人同断之事

一 當時迄私宅ニ而武藝稽古之輩総而兩榭ニ

罷出候様ニ被 仰付候然共仁躰ニより無扨諷有之於

私宅稽古被致度面々者学校御目付迄可被

一 相達候其段拙者承届可及差凶候事

一時習館兩榭ニ被罷出候刻限等之儀者其師ノニ

承合可被申候帰宅以已後或者兩榭稽古日之外師家ニ

罷出又者私宅ニ而茂同門打寄修行等之儀者可為

一 勝手次第候事

一 當時迄師を不被仕此以後師を被任候面々有之候ハ、

其段頭々より拙者ニ可被相達候事

十二月

長岡内膳

覚

秋山儀右衛門



今度学校落成ニ付御家中士席以上来正月より  
罷出候様被 仰付候右者人才鎔鑄之所ニ而候得者  
生徒之才ニ随ヒ教育勿論候寮中之記律等  
内膳殿江可申談旨被 仰出候

但輕輩陪臣農商之内秀才有之候ハ、各別ニ  
入学被 仰付候条内膳殿江可被申達候

宝曆四  
十二月日

武藝之師役ニ御渡候也  
覚

今度武藝稽古所被 仰付候間来正月より門弟中

一 於右之所稽古仕せ可申旨被 仰出候

一 當時迄ハ向方江罷越指南茂有之由候得共此以後者  
士席以上大小身之無差別右稽古所ニ罷出候様被

一 仰付候間私宅ノニ罷越指南被仕間敷候若  
無拋訊有之招キ被申度衆者内膳殿被承届差函

一 稽古日等之儀者諸師兼而被申合不致混雜様ニ

一 刻限を分可被罷出候  
同日之稽古ニ候ハ、四時より八ツ時迄八時より七半時迄ニ

一 輕輩陪臣たり共拔群之者各別ニ入榭可被  
仰付候条内膳殿江可被相達候

一角場之儀今迄之通可被相心得旨候  
此稜者大筒師範江相渡候  
書付迄ニ調其外江者省

右之外内膳殿より追々可被申聞候各より茂被申達  
且又学校御目附江可被申談候

宝曆四年十二月

宝曆四年十二月廿九日  
一時習館二三拾人扶持御附置候付来正月より相渡候様  
御勘定方江及沙汰候間学校付御役人より月々  
請取切手仕出候様との書付学校御目附江相渡  
候事

三日 時習館講釈日  
但五半時揃始  
八日  
十三日  
十八日  
廿三日  
廿八日

右之通相極当月十三日より相始申答候事  
一素読等ニ被罷出候儀者来ル十五日より之事  
一兩榭ニ被罷出候儀者師範ニて承合可被申候事  
以上

宝曆五年正月六日

内膳殿より被差越候

時習館

一 參校之輩教授職之差凶違背有之間敷候事

一 高聲雜談謡曲等無用之事

一 素読ハ參校遅速之次第之通たるべき事

一 寮中酒一切禁制之事

一 兩榭之輩師範之差凶違背有之間敷候事

一 出榭之輩師範之差凶違背有之間敷候事

一 高聲雜談無用之事

一 酒禁制之事無用之滯榭有之間敷候事

一 稽古相濟無用之滯榭有之間敷候事

一 南門

一 從是内無用之輩堅入間敷者也

宝曆五年正月日 奉行所

中門

安永五年五月朱書之通改り  
学校方ニ而相調候事

御留守居大頭同列以上

從是内御城代衆以上者若党式人草履取一人

着座以上者衆者若党一人草履取一人着座

以下者草履取可被召連也

宝曆五年正月日

東門

御留守居大頭同列以上

從是内御城代衆以上者若党式人草履取一人

其以下者総而草履取△

着座以上之衆者若党一人草履取一人着座以下

草履取△一人可被召連候

一 無用之輩堅入間鋪者也

宝曆五年正月日

奉行所

学校門番人ニ相渡せ候書付  
覚

一時習館ニ出候面々者東南之両門より出入有之筈候事  
但右両門共平日くゝりより出入之事

一 御一門方御家老中御出之節者下座可仕候事

一時習館ニ被罷出候衆南門より出入之節者中門より内  
御城代衆以上者若党式人草履取一人召連

被申筈候事

一 着座以上之衆者若党一人草履取一人着座以下者  
草履取一人召連被申筈候事

但東門より出入之節茂右同断惣供者南門之供

腰懸ニ廻置鎗挟箱等者門外ニ差出被申筈候事

一 南門出入之儀別而入念万事学校御目附并

御役人受差図相勤可申候若不審之者入込候ハ、

其名を承届即刻右御目附御役人迄相達可受

差図候事

一 出家沙門并女物売之類其外無用之者堅入

申間敷候事

一 無拋用事之者何某方江之用事ニ付参候との儀  
其姓名を承届入レ可申候勿論下々者何某江之

使との儀双方名を承届入レ可申候事

一夜中若火事之節者右御目附并御役人何連茂  
驅付有之筈候間兩所之門共ニくゝりを明ケ出入  
有之候様可仕候事

宝曆五年正月

一 宝曆五年正月

一 隼人様時習館江御出之節兩所之御門御出入之儀  
弥くゝりより御出入可被成候間門番江其沙汰有之候様及  
達候事

文化三年八月也

職五郎様同所御入之節兩扉開候方ニ相被究

候事

但此節隼人様未長岡 凶書殿養子ニ不被  
仰付前ニ而候也

一 宝曆五年二月二日

一 阿蘇中務明日より講釈ニ出席有之度内意頼来候得共  
先見合被申候様及返答候事

一 宝曆五年二月

師役於私宅之稽古  
御発駕御下国之御当日被相止候様五節句盆二日  
兩社御祭礼ハ師役く之了簡次第被仕候様時習館も  
右ニ準可申と学校御目附より依問合及返答候事

同年十二月  
一時習館講積十二月十八日限會読素読同月廿日限

兩榭稽古十二月廿日限相止時習館講積正月十三日より  
會読及素読同月十五日より  
相始申筈之旨内膳殿より申來候事

一 宝曆六年七月  
出榭等之儀士席以上と被仰付置候処輕輩陪臣者

夕飯後く出榭士席ニ交り不申候様稽古仕せ可申旨  
被仰出候間輕輩陪臣之門弟中江被申聞候様尤  
出榭等之儀者御目附江可被申談旨沙汰有之候由長岡  
内膳殿より書付被差越候事

輕輩陪臣出榭之節士席以上等対し  
礼法正しく分限明白に有へき事  
右可相守也

内膳書判

一 宝曆六年閏十一月  
五ヶ庄左座大蔵嫡子主礼と申者出榭如願被  
仰付候事

(付札)

二八代文武稽古所之儀  
宝曆七年十一月相始  
候事

同七年七月  
一 赤尾口於角場大筒稽古打方之儀穩便内并  
御征月之御日柄者見合其条之御日柄者稽古支  
不申段達之事

宝曆十一年正月

一 今度講堂出来候付来ル十五日被遊  
御出座講釈被 仰付候付麻上下着四半時揃之旨  
右ニ付御物頭兩人警固ニ被罷出候事

同年同月

一 講日被罷出候面々時習館御玄関より出入有之候様  
揃所者掛札有之講釈始候節講堂江出席之儀者  
御使番より案内申達座着次第等儀者御小姓頭  
御中小姓頭并御使番より差函可有之旨達之事

宝曆十一年三月

一 講堂江被懸置候  
御筆之額仰止と被遊候事

覚

一 門弟中無怠慢様常々世話可被仕儀者勿論之事  
候得者弥以相励候様心を付被申以来左之通  
一 稽古厚心懸夫ニ応し藝術茂追々熟練  
可仕輩之事

右每年十月中書付を以拙者方江可被相達候尤  
出榭其外心懸之次第委書記相達可被申候事

一 師範之申聞茂不相用出榭茂怠り至而不精神移候

輩者門弟ニ可被加置茂無益之事ニ付門弟可被

差除候尤右之趣前以被相達候ハ、承届候上可及

差凶事

但数年出精有之藝術茂大躰熟練之面々

或者四十歳以上之面々稽古間遠有之坎又ハ

御役付ニ付稽古相止居候面々者格別ニ可被相心得候

事

右之通可被相心得候物而出榭之節者別而形儀正敷

有之候様示可被申候若猥成様子茂候ハ、師範之

越度ニ可相成候以上

宝曆十一年

十月日

長岡内膳

一 学校屋敷坪数之事

溝口蔵人上屋敷分

磯野左兵衛右同

一 寮合式千百式拾六坪

一 居寮壁書之事  
一時習館居寮之輩江用事有之面々昼之内

入申間敷事ハ、御役人承届対面仕せ可申候尤寮内江者

但夜中者無用



一 居寮之輩夜五時を限東門出入可仕事

但病用者格別  
右之通候事

宝曆十二年四月

一 三御家老之嫡子句読江出席之節見習之内一人付置  
退出之節者御玄関迄送り候様学校御目附より依伺  
及差込候事

宝曆十二年六月

一 御巡見様御城下御通行ニ付時習館兩榭稽古其日ハ  
被差止候事

覚

士席以上之子弟講日毎月左之通

八日 十八日 廿八日

右之通候聴衆揃所者三ノ日之通時習館ニ而兩所江  
懸札有之筈候事

一 講席者三ノ日之通候事

一 聴衆出席名前記之儀茂右同断

一 右講日三者御家老中茂折々出席有之筈候事

一 右同御使番之内被罷出講席座配等差込有之筈候

事

一 講堂廊下箱段下押歩御小姓一人三ノ日之通被

一 指出筈候事  
時習館玄関前押足輕茂右同断

右之通候条学校御役人江茂夫々可有御沙汰候  
以上

宝曆十二年七月十二

学校方御奉行中

一 同年八月  
火事之節池田手永より夫方五拾人学校東之塀際ニ  
揃申筈之由御御郡方江記録有之候事

一 同年十月  
時習館両榭之儀向後者御家老中御中老世話

有之候様被仰出候諸事内膳殿節之通被相心得候様  
右ニ付被相伺候儀茂有之候ハ、拙者共江先可被相達旨  
学校御目附江及達候事

覚

一 学校江被付置候御扶持方三十人扶持并塩之儀當時迄  
差引算用無之候然処当月より毎月御扶持方并

塩共差引算用仕其元印形を学校御目附  
御横目印形を取置明年九月至一紙之差引算用

仕上ケ帳面を以後年共学校方御奉行江可被相達候  
見届可申筈

一 並味噌 醬油

右 両品 学校より直買ニ而有之候処 以来者御賄物所より  
相 渡申 箸候間通帳を以追々受取一ヶ年限本切手

を 以通 前立用可仕候

一 御 勘定所より小間物品々受取并御借渡之道具通帳

一 御 作事所ニ而品々出来并御繕之儀付而之通帳

右 通帳 以来者其元并御役人御横目印形を用候上

今 迄之 通学校方根取致加印箸候  
右 之通 学校御役人中へ被申聞候様 宝曆十三年  
十 月 楯岡小七郎 学校士席 江及達候事

御役人

一 宝 曆十三年十月  
一 時 習館江被付置候 三拾人扶持之外ニ今度銀百枚

每 歳被 渡置箸ニ付居寮之面々并其外賄米雜用共ニ  
右 御扶 持方之内より引之餘米者年々各別上納有之  
候 様及 達候事

一 同 年十月  
一 時 習館御書物於学校取遣之儀 以来者通帳

印 形無ニ取遣いたし候儀者決而不仕一月くニ取揃  
受 取候 分通帳之根帳ニ割印用申箸之由楯岡  
小 七郎 より達ニよつて其通及差図候事

宝曆十四年三月 明和改元 七月

朔日

一時習館居寮之面々之儀 以来者三ヶ年限ニ而其節之趣  
次第直ニ又三ヶ年居寮可被仰付候依之今迄  
居寮之面々茂右之趣ニ而此節より直ニ三ヶ年  
居寮又者人物ニより此節退寮茂可被 仰付候  
右之趣御中老より藪茂次郎江被申聞候事

両榭使役へ相渡り候  
覚

一 両榭ニ被罷出候者十五歳以上之事

但拔群壯健或者藝術之器用次第二者

十五歳未滿たりとも出榭可被 仰付候条  
師範より可被相達候事

一 門弟成有之節者為祝儀扇子筆紙墨之内一品  
可有受納事

但筆者二対より二十対迄紙ハ弑束より五束まで  
墨者一挺より五挺迄扇子者二本より十本ニ不  
可過事

一 武藝稽古之輩惣而両榭江罷出候様被 仰付候

然處仁躰ニより無抛訳有之於私宅被致稽古度  
面々者学校御目附迄可被相達候其段拙者共  
承届可及差凶事

一 出榭之節座配之見合無之何茂師範座上有之

一 形儀正敷師弟之間嚴重ニ可被心得事  
一 輕輩陪臣者士席一同ニ出榭有之間敷事

但藝術拔群之者者師範より達ニよつて

士席一同之出榭 御免有之事ニ付士席輕輩

之分明白ニ有之候様夫々師範より常ニ心に付  
可被申事

一 一代御中小姓之子弟者席之定り無之事ニ付士席

一 一同之入榭容易難叶候事

一 於兩榭稽古定日之外榭拝借有之門弟計罷出  
稽古有之節師役罷出不申候付門弟之内代見

被極置引廻罷出可被申候左候而其段学校

御目附江可被相達候事

一 稽古厚心懸夫ニ応し藝術茂追々熟練可仕

輩之儀者毎年十月中書付を以拙者共江可被

相達候尤出榭其外心懸之次第委く書記

相達可被申事

一 師範之申分茂不相用出榭茂怠り至而不精ニ

押移候輩者門弟ニ加へ被置候而茂無益之事ニ付門弟

可被指除候尤右之趣前以被相達候ハ、承届候上

可及差凶事

但數年出精有之藝術茂大躰熟練之面々

或者四十歳以上之面々稽古間遠ニ有之坎又者  
御役付ニ而稽古相止罷在候面々者各別

可被相心得事

一 四時より入榭八時退榭之事

一 供之者ニ至迄諸事不形儀無之様堅可被相示事

一 師範之面々稽古定日ニ入榭之節者其段学校ニ

罷出可被相達事

一 師範之面々者門弟より以前ニ入榭門弟より以後ニ

可有退榭事

一 出火之節者勿論或者宿元より告来候趣を以退榭

無之候而者難叶時分者其旨学校御目附江対談

之上可有退榭事

但銘々屋敷近火と相見へ其外至而急速之

事ニ而退榭有之候ハ其段門弟之内を以

御目附江可被相届候事

一 門弟中稽古定日ニ出方少八時以前退榭有之度

節者其段学校御目附江相達可有退榭事

一 兩榭稽古正月十五日より始十二月廿日限之事

右之通可被相心得候事

明和元年四月機密間承合記置候也

明和元年六月

一 学校御取建ニ付而薩州様御留守居より江戸御留守居江

問合ニ付返答之趣左ニ申向候事

記

一 於国許文学并武藝之稽古所被申付置士席

以上之子弟罷出致稽古候事

一 武藝者徒士以下家中之家来等茂時刻を分ち

稽古罷出候事

一 文学者徒士以下家中之家来并町在之者たり共

拔群秀才之者者出席差免候事

一 明和三年二月  
居寮之面々居寮中者草野雲平 助教 支配被

仰付候事

なり

一 同七年正月  
御掃除方支配之内拒馬臺鉄砲一ヶ年四度充  
稽古被仰付筒薬一度式貫百目火縄ハ曲充  
被渡下旨及達候事

一 明和九年正月  
今学門弟中之稽古先師より相伝候書籍之次第を以

教示有之儀ニ而講釈等者其通可致儀勿論候処  
入門初学之輩者先一騎前を第一にして

其上之儀も段々階級を以 教示可有之候

左候得者入門日浅クとも先一騎前之事者相濟候間

自然入門之輩茂相増武氣之倡者不及申御備

強ミニ茂可相成事を存候間右之通被相心得候様依之

被相尋事も候ハ、内達有之候様師役中江書付

相渡候事

一 明和九年正月  
松平薩摩守様御通行ニ付棒火矢稽古被差止候

事

同年三月  
一 学校物書塚本仁兵衛実母之忌御免之儀達ニ成候処

無拋筋とハ相聞候得共於学校者右等之儀ハ別而  
重ク相心得不申候而者難叶訳之所柄ニ付外々之  
見合ニ者相成間敷之御免ニ不相成候事

安永二年二月  
一 町在之者時習館江居寮被 仰付儀者抜群之者ニ

限り候事ニ付向後共ニ右躰之者者居寮可被  
仰付候尤御郡代存寄被承届候上決定之儀可及  
達旨堀平太左衛門より御郡頭江書付被相渡候  
事

安永二年閏三月  
一 学校御用之卷藁出来之儀学校より申付有之候ハ

諸造用手輕出来候由達有之候得共左候而ハ自然  
御側組仲間中不手馴候而可及退転ニ茂哉矢張  
今迄之通手伝之荒仕子一日四人充晴天十五日  
被渡下段及達候事

同年四月  
一 薩州様熊本御通行ニ付両榭試業中ニ付学校

東南之御門江外様足輕一人充差出置右御通之節  
供之者共者門内江入置且供之鑓馬等者南門脇  
供腰懸ニ入置候様御通之節試業者相止候ニ者  
不及段及達候事



本行之趣廻役よりも心を付候様押之足輕者主水殿  
屋敷長屋北脇助右衛門殿屋敷南脇口江一人充  
被差出押分兼相勤候様翌年二月及達候

安永三年五月  
一金瘡師被仰付置候面々稽古者兼而執行仕候得共

金瘡之方稀ニ有之候付切口等之様子委敷吟味

達

仕置度○有之候付於井手口斬罪者被仰付候節  
得と見置申度由願書御刑法方江差廻候事

同年八月  
一御作事所御役人廻役等袴無ニ入榭不苦旨伺  
伺及差図候事

安永三年十二月  
一年始時習館江被遊

御入候節開講有之師役中被  
召出者無之候 召出ハ御帰国之上被為 尤東門より被為

入候節計と記録有之候也

入右御門内杉ノ木下江御家老御出迎有之  
御奉行者御出迎者無之候事

本文之通候処当事者年始

御入者諸師役被 召出旨定例ニ御用人より由来

其外御登駕前并御着座後初而

御入之節者諸師役被 召出之儀何方より茂

不申来候得共学校方定例手数二而諸師役江及達候  
委細此節 文政五年 致出来候学校

六月

御入格帳ニ記有之候事

安永三年十二月  
一長崎町医真野三啓依願時習館出席被  
仰付候事

同四年十一月  
一若殿様御禮 十五日 被遊  
十八日  
廿二日

御受候付館榭之稽古相止候事

安永五年六月  
一御知行取死後其子忌明未家督不被

仰出内時習館且兩榭江被罷出候哉否学校及  
問合候処被罷出筭相究居候由将又隱居願等相達被  
機密間目安

父病死跡嫡子出榭者不苦内稽古者

置候茂右同断之由返答有之候事

遠慮尤二男以下者不苦

同六年正月

一 稽古町打等之節常服ニ而鉢巻裁付者着用不苦  
陣羽織火事羽織等着用捨可有之旨達之  
事

文政三年四月此奥ニ稜書アリ

大小筒之無差図砲術音等相止候也

一 安永八年十一月  
穩便中螺貝稽古并大筒打方迄相止候様及達  
候事

穩便之儀達之文面ニ繕作事之事如何様とも無之  
候得共繕作事相止候ニ不及由候右兩条相止候儀  
今迄不及達候得共此節申談本行之通候事

一 安永十年四月  
一 兩榭試業之節御小姓頭御中小姓頭之内故障等ニ而  
一人茂出方無之節者学校出席之御奉行江被申達候様  
御小姓頭江可及通達旨候付及通達候事

一 同年十月  
一 御家中之子弟時習館兩榭江被罷出候内着座以上之  
子弟々々者少年たりとも講日之外時習館江不被  
罷出定而於宿元讀書等有之故とハ存候得とも

只今之通ニ而着座以上之子弟ニ限於時習館讀書  
無之儀格式之様に相成候而少年之輩者猶以追々  
被差出候様有之度尤不被差出誤茂候ハ其段内意  
有之候様ニとの書付御用番より被相渡候事

天明四年二月  
於大慈寺川原騎射稽古場有之候処横手手永椎田村

之内而四反余地子借ニ而稽古有之度如願垣廻等之  
造用者御出方被仰付来ル七日より稽古相始毎月三度充  
二ノ日ニ稽古仕候段境野嘉十郎齐藤権之助より達  
有之候事

天明四年七月  
騎射稽古之節於馬場行騰烏帽子素袍着用  
不苦旨依伺及達候事

天明四年十二月  
射禮稽古之名前依問合達有之候事  
但御知行取以下浪人陪臣一領一疋共に四十七人にて候也

同年十一月  
歩御使番以下追廻等ニ而馬稽古被仰付度由中津  
角七より達有之候得共御歩之名目之面々馬稽古  
難叶旨及達候事

寛政元年九月  
政元館講釈之節聴衆之供之者之内高聲其外  
不時習儀之躰有之候間押之輕共より制候而茂承引  
不形儀之躰有之候間押之輕共より制候而茂承引  
不致候由相聞不埒之至候間右躰之儀無之様主人  
屹卜申付可被置候以来押之足輕共より制候而茂承引

屹卜申付可被置候以来押之足輕共より制候而茂承引  
不致候由相聞不埒之至候間右躰之儀無之様主人  
不時習儀之躰有之候間押之輕共より制候而茂承引  
政元館講釈之節聴衆之供之者之内高聲其外  
寛政元年九月

致候ハ、主人之姓名共承届相達候様及達候段一統  
及達候事

寛政二年十二月

一 藪茂次郎草野雲平折々時習館江被罷出候様被

仰付置候得共老年ニ而歩行難渋ニ付赴館之節案駄

被差越候様昇人之儀者此方江御役人より通帳を以相達

候様尤出席之刻八ツ後迄滞座有之候ハ、御賄可被下旨

年始二者一汁三菜之御料理御吸物御酒御肴三種

(付札)

「寛政二戌十二月佐敷文武稽古所建」

御菓子被下置高本慶蔵 後 伴食可有之旨慶蔵より

敬蔵

依達右之通ニ仰付候事

寛政二年

一 佐敷武藝稽古所小笠原多宮 御番頭 達ニよつて建方被 仰付候事

ナリ

寛政三年三月

一 佐敷稽古所掟書案文同所御番頭江差出候事

一 稽古所江罷出候面々師範代見等之差凶違背

一 有之間敷事

一 高聲雑談無用之事

一 酒禁制之事

一 稽古相濟無用之滯座有之間敷事

一 寛政四年正月  
御在府年正月十三日時習館開講之節歩御小姓

外様足輕御掃除坊主出方之儀定達ニ相成居候段  
記録有之候事

一 同年二月  
御城東下元竹小屋跡御開犬追物稽古場出来ニ付

壁書相渡候事  
從是内騎射  
無之輩堅入  
稽古の外御用  
間敷也

一 寛政四年二月  
尾州之僧月照院御当地江参居管弦舞曲ともニ

相伝相濟居候由ニ付時習館諸生江稽古仕せ度尤  
装束等無之候而者舞曲難成候付先仮ニ布類ニ而拵  
稽古被仰付度由達之通被仰付候事

一 寛政四年二月  
御免被仰付置候処今年之儀閏月ニ入候而者閏作方

二月

延立ニ付射獵者難叶旨師役くへ達有之様及達候  
事

寛政四年五月

一 榭毎之柱壁戸板等落書多

御在国中者臨時之 御入茂有之候処不敬ニ有之

畢竟師範出方遅有之心を付候儀行届不申故と

相聞候間兼而御渡被置候御書付之通弥以相心得出勤

有之候様若病中故障等之節代見被罷出稽古之儀ハ

勿論諸事不敬ニ無之様との儀御家老中江相伺

学校御目附より師範く江及達候段知せ有之候事

寛政五年六月

一 歩御使番歩御小姓江為御軍役金瘡稽古之儀

靈感院様依思召被仰付安永二年之春より

栗崎道節江指南仕候様被仰付候段記録有之候事

但栗崎道節草野道寿門人福岡英安門人試業

有之節前後之事候有之候付於再春館仕来候通取計

有之候様及達候節之扣也

寛政六年七月

一 三入講日ニ学校御家老間口之押者歩小姓罷出候処

出方無之候付自然不敬之儀有之候ハ如何取計

可申哉と伺ニ付右躰之節者時宜ニ随ひ御役人之内ニ而も

罷出見繕候様申談被置候様学校士席御役人江

分司より及達候事

寛政六年七月

一 御入之節講堂前往来者御家中家来くたり共

堅通間敷段及達置候処定例之講釈相濟候得者  
惣聴衆者退出之筈ニ付其節者惣聴衆之家来く  
不罷通候而者退出難相成由ニ付講日ニ  
御入之節者右講釈相濟候様子学校承合  
家来く者御玄関前差出退出相濟候ハ、尚又  
最初之通往来差留候様との儀歩御小姓組脇江及達  
学校御目附等江知せ之事

寛政六年十月  
一 御入之節徒御小姓押之内学校多門際ニ兩人差出  
来候處被差止以來者講堂揚り口江右兩人為  
押被差出旨及達候事

同七年五月  
一 句読習書ニ被罷出候面々無扨筋ニ而出方被引候節  
間ニ者何方江茂答無之族も有之候左候而ハ人数  
名付候しらへ等之差支相成候間以來右之通之節者  
在勤者其身子弟者父兄より其師範く江相答  
被申候様兼而通達被置候様輕輩之儀者各別之願  
を以出席御免被仰付儀ニ有之候間出方相止候事ハ  
別而不容易事候此段茂兼而相心得引取候節者  
勿論前文之通心得候様被申聞置候様句読師習書師江  
高本慶蔵より被及達候事

寛政七年九月  
一 学校江当事被建置候御蔵ニ余計之御書物等被



入置候処御臺所江茂間近若出火等之節防方など  
便利茂不宜旁ニ付御蔵一軒建方被仰付度段  
達有之候得共新規之儀者難及僉儀御太切なる  
御本類御城内御宝蔵ニ被納置候間御書物風入等  
之節者学校御役人被指出取計有之候様且御所柄  
之儀ニ付其節ニ至被差出候御役人二者各別堅被  
仰付旨同所御目附江及達候事

寛政七年十月  
一 佐敷稽古所休息所無之候付一間ニ九尺新規建繼  
被仰付御入目者稽古所造用として一ヶ年式百目充  
被渡下候余分を以取計有之候様及達候事

寛政八年正月  
一 時習館開講之節者学校方分職より罷出月並  
講日二者惣輪番ニ而罷出候尤月並講釈後申渡  
有之節分職之内一人出方之儀御用番より書付  
被相渡候得者各別分職者出方不及輪番出懸り  
より兼相勤候事

寛政八年十一月  
一 武藝師役之内相伝等早目ニ相見強年数ニ茂拘候儀ニ而も無之一概二者  
難申候得共目錄以上と申候得者隙立候程之位ニ至不申候而者難  
相濟御賞美筋ニも相関候事ニ付見聞候内右躰之輩  
有之候ハ被得内意候上及相談筋も可有之旨学校御目附江  
書付相渡候事

覚

時習館兩榭共ニ以來者  
上覽有無ニ不拘一ヶ年一度充可致試業候且又  
教授江今日相渡候書付写別紙二通相渡候間  
学校御目附江夫々各より可被達候以上

寛政九年

正月廿一日

近年於学校御記録しらへ被仰付置候處  
以來被差止候条左様被相心得其段記録間出方之  
面々江茂通達有之御記録片付方之儀申談次第  
可被相伺候  
一此度別紙相達候通付而者是迄之通御記録  
しらへ方を茂相混候而者甚以可為繁雜候  
将又教授職之儀学校中人才之化育を被  
任置候上御記録しらへ之儀も併勤被  
仰付置候而者兼而  
御優待之御旨趣ニ茂当り兼候間旁以前条  
之通候条此段茂左様可被相心得候  
正月以上

學問之儀當時一統相勵候儀二者候得共於學校

誘方之儀以申談候様被

仰出候依之諸生中競之ため且者諸生之

學業才器を試候ため以來皆共より折々策問并

詩題等出可申候間諸生中思ひく何しにても

致出来候ハ其分取揃追而可被指出候將又

試業之儀も毎年一度充者

上覧有無二不拘不欠様可致試業候条夫々

左様可被相心得候勿論一年中諸生教育方

之儀猶精々心を用候様可被申談候以上

正月

一 寛政九年四月  
時習館兩榭試業之節御備頭以下案内并書付

差出候儀御役人より相勤候由右之儀以來被改御留守居大頭

同列人以上者御目附より案内有之右之序書付茂被

相達着座ニ茂同人より案内有之書付者是迄之通

一 寛政九年閏七月  
火術試候所柄之儀付而者此節一統

川尻大慈寺河原或ハ所々川口人家

田畑を離候場所ニ而被相催候様若子細

有之右外之所ニ而火術仕度輩も候ハ

前以所柄被相達候様ニと一統触

及達候通ニ付門弟之面々火術業試之儀所柄心得違  
無之様師役手前より兼々委示方有之様各別  
可及達旨ニ付通達有之候様学校御目附江及達候事

(付札)

「寛政十年  
郡局ニ委」

一 寛政九年十二月  
東竹丸下明地犬追物稽古場ニ被 仰付置候処此節

元々之通被復旨被 仰出候間右場所ニ而之稽古  
被差止旨御用番より書付被相渡候事

一 同年十二月  
竹迫手永群村之内ニ而炮術師役依願火矢打方

定町場ニ被 仰付後年共ニ火矢打方之節々出夫  
難渋ケ間敷儀無之拝借御取立之儀も願出等仕間敷

との趣請合之書付相達候願高九貫目余一ヶ月  
七朱利付メ拝借被 仰付御取立之儀者年々

火矢打方之節々入目悉皆御取立被 仰付旨  
及達候事

一 寛政十年二月  
豊後高松之産脇儀一郎被召呼訓導御雇被

仰付御雇中三十人扶持被下置高本慶蔵教授支配被

召加士席之御取扱ニ而於学校之座順者平士御儒官  
之末ニ被付置旨達有之候事

寛政十年三月

一 於追廻御家中之子弟等馬乘方試業之節流儀外之  
面々見物等ニ被罷越候様子ニ付以來者他流入交無之樣  
其師役ノ江達有之候樣御用人江申向候事

寛政十年五月

一 芦北一領一疋騎射稽古不苦地士ハ難叶旨及達候事

同年十二月

一 出榭不致輩室園ニ而鉄炮打方并火矢町打者  
難叶旨及達候事

同十一年三月

一 脇儀一郎訓導御雇被仰付置候処元來多病其上老母  
郷里を離不安堵之躰付而者奉職難相勤旧里ニ引退  
申度再往願之趣被奉達

御内聽候處陳情之次第無余儀事ニ被

思召上候折角被召呼由処右之通ニ而者甚

御残念ニ被思召上候鶴崎之儀者儀一郎旧里ニ隣リ

親類茂有之様子ニ付被下置候御扶持方三十人扶持

直ニ被下置鶴崎江可被差置候間老母孝養を茂

尽將又折々学校ニ茂罷出是迄之通訓導之

勤方可仕旨被仰出候付及其達候事

寛政十一年五月  
一 統彈右衛門家来板井運右衛門儀古屋鼎門人引廻  
致世話候様被仰付旨及達候事

同十二年二月  
一 群原火矢町打定小屋江被建置候掟書杭木写

學校方ニ而調可相渡候間炮術師役より學校方根取江  
懸合請取方有之候様學校御目附江及達候事

一定町場四方之杭木

一場之右建

同左建西ニ横一町北ニ堅拾六町火矢打定町場

同左建東右同断

矢落之右建

矢落之西ニ横一町南ニ堅十六町右同断

矢落之左建

一 町限杭木左之通

一 町打場より壺町

一 小屋内壁書板ニ左之通

一 町打稽古衆中流儀ノ炮術之意味相伝

一 師役并代見之差凶有違背間敷事

一 之通精々心を用執行可有之事

一 師役并代見之差凶有違背間敷事

一 師役并代見之差凶有違背間敷事

一 師役并代見之差凶有違背間敷事

一 火用心專一之事

一 農業作方之障ニ不成様心得畦道筋を通

畑中ニ猥ニ入間敷事

一 近辺御山内ニ入間敷事

一 喧嘩口論雑談等相慎諸事強儀之取計

有之間敷事

一 但供之者末々迄不形儀無之様可被申付候事

一 小屋外ニ有止宿間敷事

一 村方江出入無用之事

一 但無抛子細有之ハ師役江相達差凶次第

之事

一 村方より諸道具等借用有間敷事

一 夫仕等ニ付強議之取計有之間敷若

子細有之ハ師役江相達可被受差凶事

右之趣堅可被相守也

一 寛政十二年四月

一 寅次様御逝去ニ付 御葬式被為濟候迄者高本

慶蔵取計を以時習館稽古被差止候儀可然来ル十八日之

講積被差止候儀者惣達ニ相成候事ニ而外之儀不对ニ茂

有之仰山之儀茂無之事ニ付被差止候二者及間敷旨

慶蔵伺ニよつて及差凶候事

一 寛政十二年七月

一 脇儀一郎大病後記憶等茂薄御奉公難相勤御役名

御省被下御扶持方不殘被 召上被下候様依願訓導之  
勤方被遊 御免候尤御扶持方之儀者強千御役有無二  
より被下置稜二而茂無之儀 一郎事者往々  
思召之御旨趣茂有之仍而去春鶴崎江引移候節茂  
直二三三人扶持被下置候間 此節茂全可被下置之處  
左候而者一向儀 一郎志願不被立下二相当候間十五人  
扶持ニ被減座席支配方共ニ是迄之通被  
仰付置候間緩々保養相加候様被  
仰出候旨ニ付高本慶蔵江及其達候事

寛政十二年八月  
一 御近習外様之面々数人於江戸 田安様御用人

長野鞞負殿江舞楽稽古被 仰付候他二者容易  
伝授難相成由之処

此方様者永く時習館江伝へ可被為置旨申向ニ相成  
田安様達 御聴候而懸合相濟鞞負殿被 召呼  
御対顔を茂被 仰付候間於時習館稽古仕せ候筈之処  
差寄装束等無之候而者難成入用之品被渡候様  
高本慶蔵達之通被渡下候事

寛政十二年十月  
一 松平阿波守様御儒者柴野平次郎 西御丸御附柴野 高本

彦助殿嫡子也

慶蔵方江逗留之処依願時習館 御入之節  
御目見被 仰付候事



寛政十二年十一月  
一 西村勘解由判官時習館講日ニ罷出度由不苦旨及

此一件者機密間しらへニ候処学校方 達候事  
二而巡覽等相濟候ニ付此節ハ此通也

同年十二月  
一 犬追物稽古之儀向後者館榭之諸藝同様学校

御目附見分被 仰付旨御用番より口達ニ相成候由  
機密間より書付見せ来候事

享和元年二月  
一 犬追物稽古学校御目附見分被仰付旨付而ハ去冬

御達之趣有之  
高覽并御家老中見分之節都而学校引受之儀  
及達置 当正月 候処御様子違右

及達候

高覽并見分之節之儀等以前之通ニ引戻学校方  
根取以下罷出諸事取計申答之旨学校御目附江  
及達候事

享和元年六月  
一 東都聖堂之凶辛嶋才藏 江戸詰 より於江戸被差出候付

御儒者

写之入江十郎太夫 江戸詰 より差下学校江納置候様申来候付  
御奉行

今日学校江差越候事

一 同二年四月  
御家老中武藝見分相始候得者前後五日定例之通  
榭之稽古相止候段学校御目附より達有之候事

一 享和二年五月  
古賀弥助殿より於江戸辛嶋才藏へ肥後古城主考  
借用被致度由ニ付高本慶藏より伺有之候付差遣被  
申候儀御家老中被存寄無之段及返答候事

一 同年十一月  
御目見医師池田大民先祖以来持伝候聖像  
差上度如願被召上時習館江被納置候事

一 享和三年二月  
御勝手向御難渋付而時習館再春館居寮并再春館  
施薬被差止候事

一 同年二月  
講堂講釈之節当  
御在府中者御奉行出席被遊  
御免候事

一 享和三年三月  
犬追物稽古以来者一ヶ月三度充ニ被定置御馬者  
不被差出旨達ニ相成候事

同年四月  
一 師範之面々嫡子養子は迄者申立ニ因而稽古料被  
下置候得共以來不被下置尤藝術拔群之聞有之候  
族者申立ニ不拘臨時之僉議筋可有之旨学校  
御目附江及達候事

享和三年七月  
一時習館居寮被指止候付御横目御役人打込輪番ニ付  
一人充泊番被仰付候事

同年七月  
一時習館居寮生自炊居寮如願被仰付候事

享和三年十二月  
十三日出役之面々者平服ニ而候事

一 正月四日并同十三日時習館御規式御熨斗御鏡餅頂戴  
之儀者は迄之通ニ而御酒頂戴者一切被差止候事

文化元年二月  
一 文武藝試業之儀当年者被差止候事

同年二月  
一 大坂御用達長田作次郎学校拝見被  
仰付候事

一 文化元年九月

肥後国志從 公儀被差出候様との御沙汰ニ付嶋田嘉津次 学校方 御用懸

被 仰付候事

御奉行

一 同年十月

致列座格之由末藤新左衛門者学校 有間源内 訓導 上座ニ

御目附

着来候今度辛嶋才藏助教被 仰付候付而者新右衛門

上座ニ着候方ニ御座候哉下座ニ着候方ニ候哉去年

御発駕前於学校被 召出候節者助教之次ニ学校

御目附被 召出候得者職者御目附より者被重候方哉と

大城多十郎教授より伺有之候付山本理兵衛末藤新右衛門

助教

兩人共ニ被 召出相濟候上各被 召出ニ付可有之と御用人

御目附

懸合之上及返答候事

一 文化元年十月

左之通候事 御入之節被 召出候例書山本理兵衛より被差出

一 御家老衆学校方御奉行教授助教学校

御目附

但講釈被 仰付候得者講後被 召出候尤

学校御目附者年頭 御入之節迄

御先代者教授助教於御花畑被

召出候儀無之候間於講堂御居間被

召出候御旨之由候尤学校御目附者館榭御建立

之節より於御花畑御定日被 召出候付

御先代於講堂御居間被

召出者無之候事 召出

右之面々於御居間被 召出 御意被下候尤着座以上者御手熨斗頂戴有之候

右被 召出相濟御家老衆其外御小姓頭学校方

御奉行学校御目附迄西側二次第之通列座

之事

一 教授助教者被 召出相濟東側御連子下二

座着之事

一 但列座者無之候事

一文 武藝師役者於講堂

御左を口ニいたし学校御目附より席順之通

座ニ着右相濟候上御用人御取次之中江其段

申達左候而御次之御唐紙間中明キ被遊

御出座 御意被下候事

但御請者御家老衆被申上候終而御唐紙元のことく

さゝり候事

藪茂次郎教授之節迄ハ座着無之候処高本慶蔵

教授被仰付候以来

上之御滞座之内自身休息所ニ罷在候ハ恐入候事ニ付  
講堂之すみにも座着仕居度由内意ニよつて

東側連子下ニ罷出被申其以来同様ニ座着之由  
理兵衛より咄有之候事

文化元年十二月

一 統弾右衛門家来板井運右衛門及老衰誘導届兼候付  
於館中之会読并句読見掃御断願出候付如願  
出席被成 御免加保養勝手ニ罷出候様及達候事

文化二年二月

一 他所より学問等之為罷越居候面々時習館へ出方依願被指免置候処

御省略中者出方被指旨且師範宅々江旅人宿より通イ

候節道筋を究候様学監并助教江及達候事

附本行之通ニ付高本敬藏門人西原長信と申旅人

会業等ニ脇方へ罷越候節相連申度由若先キニ

引取せ候節者人を附可申哉尤御花畑辺杯旅人

往来不相成御所柄者勿論通行可仕様無之段

伺之通及指凶事

文化二年三月

一 他所より文武藝稽古として罷越候面々日数五十日限  
被極候間随分稽古果敢取候様教方有之五十日限  
罷帰候様尤翌年ニ茂罷越五十日滞留いたし候儀は不  
苦候得共一度ニ五十日を越候儀者難叶旨学校御日附  
助教江書付相渡候事

文化十一年正月以前通滞留日数無極

被差免候当番等万見合帳

文化二年五月  
一 若殿様御着座御当日者館榭稽古被差止

職五郎様御着座御当日者学校御門前御通之  
御刻限を考御通以前より御通被為濟候間館榭  
稽古相止候様学校御目附より依伺及達候事

同年六月  
一 若殿様今度於御花畑御禮被遊

御受候節館榭之稽古相止候ニ不及旨達之事

文化二年閏八月  
一 螺貝師役吉住角助仕立之螺貝

若殿様江差止度如願被 召上候事

自勘ニ而差上物之例後藤源左衛門 寛政六年八月紙筒 高瀬

差上御上下拝領

利兵衛 寛政十二年五月御簞差上 扣有之候事

桜御紋付御上下銀三枚拝領

同年九月

文化九年御祝御能之節ハ館榭稽古被差止候

一 今度御祝御能之節前例之通館榭稽古者相止  
不申段学校御目附より達有之候事

文化二年十月  
一 渋江宇内撰之菊池風土記被召上直に御家老間江

被留置候事

文化十年御儉約之節も此通候事

同三年正月  
一 来ル辰年迄稠敷御儉約被仰出候付左之書付  
学校御目附并助教より被差出候付被存寄無之旨

機密間  
しらへ

及達候事

来ル十五日館中出初之節師役并門弟中共  
平服ニ而何程ニ可有御座哉

一 兩榭出初師役門弟共右同様

一 文武師役門弟中共出初右同様

一 稽古之面々何藝ニ而茂初而赴館入榭之節者

上下着ニ而御座候処是又平服ニ而何程ニ可有  
御座哉

文化三年正月  
一 犬追物稽古一ヶ月三度充之処稠敷御儉約中

半減ニ被仰付候事

同年二月  
一 稠敷御儉約被仰付候付時習館兩榭之儀年限中

稽古左之通被仰付旨達相成候事

一 兩榭之儀一月ニ三度充之出方者兩月ニ三度

二度之出方者月ニ一度炮術之榭も同一度木馬

之榭者隔月ニ一度

一 山東佐十郎游稽古者今迄之通



一夕榭者差止昼榭之稽古相濟候跡ニ引上ケ  
稽古貝之榭茂昼榭ニ引上出方

一 講堂句読習書之儀隔日ニ稽古故実算学  
月二三度之稽古者両月ニ三度充池部長十郎  
星学出方者四季之内天氣宜続之時分を  
見立一ヶ年ニ不時ニ四度之出方音楽稽古者  
月ニ一度且時習館加日稽古者惣而差止候

文化三年二月  
一 今度講日三日ニ相成候付八ノ日者御飛脚番不被  
差出候付八ノ日御目附中出方茂有之節者茶たはこ  
等之取仕者学校手伝より相勤候様及達候事

文化三年八月  
一 職五郎様時習館両榭不計被成御覽儀も可有之候間  
御入之節々御供之歩御小姓御先被罷越只今御出と  
申儀致口達筈候尤御座所御畳等相改候ニ不及其  
時々毛氈御持せ御附役之内師役〈江懸合御座所  
相極右毛氈ニ被成御座候筈ニ付師役〈江茂通達  
有之候様学校御目附江及達候事

文化三 八月

一 職五郎様時習館并両榭御入之節御門両扉開キ御鍵も御門  
内江持込候事

隼人様御入ハ小くより御往来且凶書殿養子ニ

不被 仰付已前之事也 宝曆五年正月也

文化五年正月

一片岡伝左衛門被差出置候天下無双水火術之書類茂  
無之書ニ相見候付封印を用政府江被納置候且外ニ扣之  
書茂候ハ、封印を用他見等堅無之様將又相伝等  
有之節者前文之意ニ叶候様有之度由分司より書付  
相渡せ候事

文化五年三月

一 炮術稽古之儀御省略中者半減之稽古被  
仰付置候處御手当受持被 仰付候師役迄以前之通  
打方被 仰付旨及達候事

同年十二月

一 時習館兩榭犬追物并騎射之儀去ル寅年稠敷  
御儉約被 仰出候付而三ヶ年之間講積諸稽古共  
半減ニ被 仰付置候御儉約之儀者来巳年より  
猶又三ヶ年之延被 仰出候事候得共文武之稽古者  
別段之儀ニ付格別之御手当を以来巳正月より  
時習館講積を初兩榭并犬追物稽古共以前  
之通之出方ニ被 仰付候居寮之儀并犬追物稽古之節  
御馬被差出候儀者追而 此御馬之儀太田善九郎引受ニ付御馬 可被及達旨  
三疋被建置旨同年同月及達候

且再春館之儀も来正月より時習館ニ準し以前之通之  
出方ニ被 仰付候尤居寮之儀者追而可及達旨御用番  
より書付被相渡候事

文化六年正月  
一 炮術稽古并諸組鉄炮稽古半減被仰付置候處  
一 当巳年より七歩通之稽古被仰付旨及達候事

同年正月  
一 学校講日御奉行中出方被差止置候処以来三ノ日  
一 まで猶又出方被仰付候事

八  
一 安政六年九月廿日二百五十回御忌ニ付  
一 竹原八左衛門依願九月廿日本文之通被  
一 仰付候事

文化六年六月  
一 当八月廿日

泰勝院様二百年御忌ニ付於泰勝寺馬場  
御祭ニ弟子中流鏑馬奉納仕候度太田善九郎如願  
被仰付 被差延九月 候事

二十日被相勤候

但 惣人数 九十九人  
惣矢数 八百九十一本  
中矢 六百七本

文化六年九月  
一 右流鏑馬執行ニ付的支配として御側足輕九人

矢ヶ取御長柄之者九人被指出候事

一 同年十一月  
地筒之者大筒稽古之儀一人二八  
仰付置候処七步通之打方稽古被  
保田窪平山地筒五十二人之内廿四  
五人者是迄稽古

五ヶ所同九十八人之内拾三人都合四十三人之内六十人  
不致来玉菓不被渡下候処依願右四十三人之もの江茂

同様稽古被仰付玉菓被渡下旨御勘定所江書付

遣候事

一 文化六年十二月  
佐敷町別当山本万太弟仙太文学拔群出精ニ付

難叶旨及返答候事  
儀御番頭より問合来候ニ付出席者

一 文化七年四月  
永嶺三左衛門炮術家ニ而奥儀等茂相伝いたし居候ニ付

門人仕立方被仰付榭拜借被仰付候事  
此三左衛門大筒打方之仕法并持運様玉菓配り方等  
之儀ニ付見込之帳面相達候事

一 文化七年五月  
犬追物稽古一ヶ月四度追廻騎射稽古者一ヶ月

兩度被仰付犬追物所被差出候御長柄之者以来  
定付ニ被仰付旨及達候事

同年五月

一時習館居寮生自炊被 仰付置候処近来不殘退

寮二相成候依之先人数六人程

翌年二月居寮生今四人増

都合十人被 仰付旨及達候

居寮被差免為御心付一人前式百五拾目充被下置  
自炊之名目二者候得共水汲荒仕子者一人被付置旨  
及達候事

文化七年八月

一陣貝稽古之儀御精進日者御征月たり共稽古仕来

候由螺貝師吉住角助より依問合達有之候間以来者

炮術二準九月八日六月十二日九月十六日八月十六日十月廿六日

扣有之候様申達せ候事

文化八年六月

一鶴崎御船手炮術指南之起り年月等分り兼候得共

享保以前より指南有之来候由佐敷武藝稽古所ハ寛政

二年十二月小笠原多宮依願稽古所出来同三年

正月七日より稽古相始候段扣相見候事

同年十一月

一大阪於御屋敷養菁館再起 被 仰付候付

癸端ハ寛政 二年十一月之由

同所御留守居方物書御中小姓中村案太郎江館中

惣見掃并句読習書受持指南有之候様其外  
同所詰御役人之内江同様之趣を以申談有之候段従  
同所申来候事

文化八年十一月  
一 御給扶持被差放候者入榭願難叶旨炮術師役  
内尾直平江及達候事

文化九年十月  
一 高本敬蔵 隠居ニ而教授職被 仰付置赴館之儀者 御手当しらへ

依願当七月被遊 御免候

御用懸被 仰付候付案駄ニ而被罷出候処雇人等難渋ニ付  
増奉公人願有之候処学校御付銭之内を以駕夫賃  
被渡下旨及達候事

同年十月  
一 於御花畑御祝御能御興行被 仰付候付兩日共館榭  
稽古被差止候事

同年十一月  
一 時習館居寮以前之通旧復被 仰付御入目之儀者  
梅洞御開徳米櫛方納之内を以弍貫目余たけ学校江  
引渡相成筈之旨及達候事

文化十年二月  
一 中山市之進時習館塾長被差置旨於同所左之通

申渡候事

有吉将監家来

中山市之進

其方儀数十年学問研究博識強記ニ有之  
都鄙慕候而教誘を受候輩多将又主家ニ  
多年之勤勞功績茂各別ニ相聞拔群之様子ニ付  
御僉議之旨も有之候得共被 仰付様次第二者  
仮令結構之筋たり共却而迷惑ニ茂可存候間  
当分御雇ニ而時習館塾長ニ被差置講堂江茂  
罷出御儒官同様諸生を可致教誘旨被  
仰付候依之為御心附毎歳御銀十枚充被  
下置之  
但座配之儀於館中者御知行取御儒者之  
次座ニ被付置候条外席ニ而茂講学之場に  
おいてハ右同様可相心得惣而学校之事者  
助教ニ豫参し訓導ニ可致会集候尤  
居寮ニ被差置候ニ付主家之用向且私家之  
用を茂辨候為学校御門出入之儀者度数無ク  
夜中たり共勝手次第可致出入候若主家  
私宅江致滞留候節者其段学校之御役間江  
可届置候勿論助教訓導之勤方之番入  
いたし候二者不及候  
以上

文化十年三月

一 文武藝試業之儀当年より者文武と隔年ニ而  
今年者文藝試業再春館者当年見分犬追物ハ  
来年見分有之筈之段及達候事

文化十年四月  
一 教授助教佐敷稽古所学問見繕として被罷越候節  
幾日頃より被罷越候との儀佐式役迄達有之候様且  
佐敷江者最前 文化七年 申向置候付以来者不及達尤

人馬賃錢之儀茂最前願之節被 仰付置 往來之人馬  
賃者御定之

通<sub>ル</sub>学校集錢 候事ニ付是又此節改及達不申候付以来  
を以被渡下也  
ともに其通被相心得候様及達候事

文化十二年二月  
一 阿蘇大宮司父子明日講積之節被罷出候間御使番江及  
達候様助教より申來候付学校御目附より通達有之候様  
及達候事

同年二月  
一 中山市之進時習館塾長ニ被差置諸生可致教誘旨被  
仰付置候處病氣ニ付願之通被成

御免多年勤学大勢之門人仕立候付毎歳銀  
七枚充被下置候間申渡有之候様助教江及達候事



文化十二年六月

一名和桂齋川尻居住之御家人中教導可致旨被  
仰付置候付毎月三度充八ノ日夕方於御客屋講説  
仕候筈ニ付開講者昨日相濟候段町御奉行等より  
達有之候事

文化十二年七月

孤山 教授 遺稿今度上木被 仰付候一件別帳有之候

事

藪茂次郎

同年十二月

一 京都楽家東儀何某吉永紀伊介方江致滞留居

加々美重郎引廻之音楽稽古之面々追々入門茂有之  
諸生為合ニ茂相成候由ニ付滞留中上下之為賄料  
一日ニ錢五匁充学校御付錢之内より被渡下且爰元致  
出立候節者助教より相贈候振ニ而銀三枚右同様御出方  
を以被渡下旨尤當時各別御儉約中之儀ニ付  
上より御取扱等之儀難申達由を茂程能演舌有之  
被相贈度段及達候事

文化十三年十一月

一 学校居寮生當時十人を限被 仰付置候処以来者  
以前之通人数無限被 仰付御賄料之儀者人数十五人迄  
之所御付米錢分を年々受取候様被 仰付十六人以上迄  
及候得者御米三拾俵充来ル卯年迄別段を以櫛方より

御出方被 仰付筈ニ付勘弁を以取賄有之候様助教等江  
及達候事

同年十一月 一 右之通居寮生人数旧復被 仰付候付而者志之厚薄ニ  
よつて人才を被選候儀者勿論之事候得共御政教

根本之訳を以御時節柄たりとも右之通被 仰付候事ニ付  
精々心を被用成たけ御侍之子弟主ニ入塾有之度段  
助教江書付相渡候事

文化十四年二月 一 御家中之面々於追廻馬術稽古之儀以来木馬榭  
追廻稽古共惣師役打込ニ而一人充輪番ニ被罷出

御馬方組脇御目附茂一人充出席被 仰付以前之通  
追廻稽古一ヶ月ニ六度且又御厩稽古右同六度充  
定日を極追廻ニ而馬術相進候面々を御厩直り被  
仰付旨達ニ相成候事

文化十四年二月 一 左義長之節御侍之子弟等学校御門より入込西側  
堀ニ登見物有之御所柄不敬ニ茂相聞候間来年より者

廻役之内両三人程茂罷出制方いたし候様及達候事

文化十四年三月 一 郡浦在御家人渡辺弥五七門弟ニ而棒火矢毎年打方  
被 仰付置候処以来者同人門弟鶴崎定詰足輕并

在御家人棒火矢打方隔年ニ被 仰付旨及達候事

一 同年四月  
古実算学師役被 仰付候節者以來助教江知せ  
候方と相決候事

一 文化十四年四月  
有吉織部殿家来中山純之助時習館退寮後寮中  
会読等ニ罷出候様被 仰付置候ニ付若隙入等之節ハ御賄  
被下段依願其通及達候事

一 同年九月  
時習館試業之節御備頭以下手扣名禄之儀文化  
十一年手数減被 仰付候儀御役々催合ニ而差出来  
候由之処御用人より別段一通差出候様内意有之候得とも  
今迄之通と及返答候事

一 文化十四年十一月  
菊池御郡代直触葉室源次右衛門悴葉室直次郎儀  
三人扶持并今迄之御米直ニ被下置辛嶋才蔵支配被  
仰付候尤赴館等之儀於時習館宜申談有之候様

御上五節句等之御礼且 御目見ニ茂不罷出筈ニ候格合者

士席ニ被準候段先月十八日於時習館申渡有之候将又  
於館中諸事伊形庄助見合を以取計有之候様

口達ニ相成候由選舉方より知せ来候尤直次郎儀屋敷

所持不仕候ニ付屋敷被渡下候までハ只今迄之通居寮より相勤勿論寮生同様御賄被下候事

文政元年五月

一葉室直次郎退寮後寮中会読等二者是迄之通罷出相誘候様助教より申談有之候付及深更候節者止宿もいたし八ノ後又者夜分にかへ会読等格別隙入候節者御賄被下度達之通被仰付候事

同年五月

一時習館居寮生入塾之儀ニ付辛嶋才藏江依問合左之書付被差出候事

- 一 学業出精之見込有之面々
- 一 人物之見込有之面々
- 一 詩文出精之見込有之面々

右者土席以上ニ而候得者学力未出来不申候とも講堂ニ出席有之教官より見込出来之上入塾之儀及僉議候事

付紙

遠方之人ハ稀ニ出方有之候とも大躰之所を以見込可申談候

一 輕輩陪臣者前文之ケ条格別ニ見込有之ハ

及僉議候事

先年居寮御再興以来者大抵右之趣を以

申談相達候事

一 文政元年八月

一 葉室直次郎講堂江致日勤詩文之世話相誘寮中にてハ会読等茂相誘候付為御心付毎歳銀五枚充被渡下今迄被渡下候金子三百疋者被 召上旨及達候事

一 同年八月

一 学校東西御門番人以來者百日を限詰代被仰付旨及達候事

文政五年四月より番人半年代被 仰付候

当番所見合帳

一 文政元年十二月

一時習館御藏書ニ押候石印者時習館御建立之砌致出来篆書者秋山儀右衛門彫方八米田波門殿ニ而賢太夫大先生之手跡再ヒ難得品柄

二 候處最早數十年之間不断押方有之候儀ニ付次第二磨滅ニ及候而者甚以残念之事ニ付此節右石印之文字直ニ銅印ニ写取鑄方被仰付度由達ニよつて

其通被 仰付候事

一 文政二年五月

一 鶴崎佐賀関ニ而渡辺弥五七炮術門弟兩所ニ而二十人分之玉菓宇土芦北見合を以被渡下段及達候事

同年九月

一時習館試業相濟候上惣見分として御家老中出方

相成候節御奉行御目附出席ニ相成候段学校江依

問合分り来候事

一文政三年四月

御代々様御年忌御法令之節御年回御遠近之無

御差別館榭稽古相止候儀相見不申由且穩便ニ付

繕作事不相止節者館榭并師範く宅之稽古共ニ  
平常之通炮術音楽陣貝者相止候由学校へ依  
問合分り来候事

一文政三年十二月

改

後多治満卜

砲火術稽古造用一ヶ年ニ五百五拾七匁

被渡下旨及達候事

一同年七月

播州明石之御家中荻野六兵衛御国江罷越候ニ付

村井多治満門弟成ニ而流儀皆伝程ニ相濟候付六兵衛

此元出立之節樽代白銀七枚瓢五餞別として  
多治満を以被遣候事

一文政三年十二月

父兄出奔等いたし跡式不被立下もの時習館出席之  
見合有之候哉と江戸より問合来候ニ付学校江問合候処例

見へ兼候由ニ而左之書拔差出候付其俣江戸江差越候事

御咎ニよつて御知行御給扶持等被 召上候者之子弟ハ

父子御咎以後三ヶ年過候ハ、憚ニ不及館榭出席

可被 仰付候条其節々御聞糺有之候上例之通御取計

候様尤其身前条之通之御咎を蒙候者者惣而

館榭出席難叶事ニ候得共其以後各別謹慎

を加文武藝等厚志之輩者別段を以出席

御免被 仰付儀茂有之候得共是等者御咎之

様子ニ茂より申事ニ付其節被及御僉議筈ニ付

右躰之輩者筋々より願出有之候様被及御

差図候様との旨ニ付右之趣助教衆江茂御通達

可成候以上

文化十

十二月七日

佐式役也

加来弥八郎

古内円次

大矢野次郎八

学校

御目附衆中

寛政四年六月御用番衆より御達左之通

無苗之者出榭願者不容易事候処近来拔群出精之

申立ニ依而被差免儀茂有之候得共以来者目錄

以上之相伝相濟藝術拔群之者迄入榭之願

取次可被相達候以上

文政四年正月  
一時習館開講後當年より御酒頂戴被 仰付旨及達

右付而以前之通御掃除坊主罷出候様尤定例之儀ニ付  
以来不申達旨御座敷支配役江及達候事

文政四年二月  
一江戸定詰諸役人段ニ而致出奔候梅香源吾忤御長屋

端ニ被召置御救被下置候梅香大五郎龍口御屋敷  
稽古所江出席之儀句読師より伺有之候由ニ而江戸より  
問合来候付稽古所出席難叶旨及返答せ候事

同年六月  
一片岡伝左衛門兵法水練火術文化五年十一月毎年春秋

仰付度願有之来年以後春秋ニ被 仰付旨及達候  
事

文政四年八月  
一佐敷稽古所御建替出来之段同所御番頭より  
達有之候事

但稽古所之儀肆修場と唱度段伺之通被  
仰付候由機密間より知せ来候事

文政四年八月  
一梅堂新地開発之御入目之儀櫛方御出方分并壹歩  
半米代を初其外手永く会所備錢等之内立用被



仰付来候処右者根元学田之御主意を以開發被  
仰付候付年々之御所務之内半方立用に於して  
残半方者学田たるを以今年より学校方納ニ被  
仰付旨且今度佐敷稽古所建直被 仰付候処入目  
壹貫八百目右御所務之内より被渡下ル半方者  
造用渡残半方者年々櫓方より相渡来候錢貳百目  
之内百目充御取立を以屋敷方集錢之内振替被  
渡置候条右御取立分者年々此方江差出有之候様  
櫓方受込御吟味役江分司より及達せ候事

一 文政四年八月

一 諸師役指南方并相伝事等之儀取掃方被  
仰付候付而者別而被用心儀者此間申達候通候処学校  
之儀者外々御用茂多其上内外打混候而者見聞ニ  
有之候得者自然忽ニ相成候様ニも有之候而者御取掃之  
御主意ニ致齟齬候間別段之御僉議ニ而増人を茂  
被 仰付候事ニ付弥以被用心口達書 此書付者 之通被

学校方江所分

相心得候様学校御目附江濱舌書相渡候事

一 文政四年九月

一 木馬榭当時迄五人打込ニ而出榭有之候処此節より一ヶ月  
一人ニ一度充出榭被 仰付旨ニ付来月六日より順々出榭  
相始候段学校御目附より達有之候事

同年十月

一 村井多治馬 御物頭 船軍術師役兼帶被 仰付置其迄ハ

なり

諸師役を離達書等被相達來候処以来者諸師役  
同様相心得諸事學校御目附江懇合ニ成候様及達  
候処封物之外諸願等者是迄之通直ニ被相達度由  
達有之候間門弟中之儀付而之達并町打等之節者  
外之師役同様其外諸願者是迄之通被相心得候様  
及達候事

文政四年十月  
一 學校御文庫依達別段を以學校集錢ニ而御建方

之筋も

梅洞新地之御所務  
を以御出方之僉議也

可有之候条猶至其期伺出有之候様及達候事  
但間数者式間半梁四間積前錢高者五貫四百  
八拾七匁五分ニ而候也

同年十二月

一 寮生 梶原五郎助御書物火鉢之内ニ落焚損恐入

トテ 柄

候段申出候御書物を損さし并火用心薄候儀者  
教授より責罰を加暫外出等差留引入戒慎仕居  
候様可申付哉と伺之通存寄無之段及達候事

文政四年十月  
一 播州明石荻野六兵衛方江宇野貞之助列四人砲術

為稽古罷越候処極意之業不殘直伝其上砲術  
免状之卷右四人江授与有之候段六兵衛より御用人江  
当テ書状来候ニ付返簡者学校方分職より仕出  
且別紙を以右為御挨拶脇差一腰御贈物被  
仰付候事

文政五年閏正月  
一 習書齋此節御建継被 仰付御入目者学校御付米錢

餘分上納引除之内より取賄被 仰付旨及達候事  
但寛政元年習書齋御建方 此御入目拾貫 相成候

百四拾五匁

時分者惣員百人余ニ而候処当時者式百七拾  
壹人之出方之由達有之事

文政五年三月  
一 當時試業之処覩見之人多制方届兼不作法之儀も

有之由ニも押之足輕 今迄ハ 今式人増人学校江被

式人

差出旨及達候事

同年七月廿九日

右今日迄ニ拔書出来此後格式等ニ可相成ケ条者  
其時々不洩様書繼申筈候事

天保七年四月十四日

一 武藝試業ニ付諸生揃方及遅刻相始候刻限

延引いたし候付以来者朝五時前迄ニ相揃四時迄ニ

相始候様自然揃刻限迄出方無之面々者追而出方

に相成候而も名前被差省候様学校御目附江達

委クハ学校方帳ニ記録有之候事

嘉永二年二月

医学寮帳ニ記録有り

一致病死未夕相続不被 仰付御医師并子弟

之面々再春館出席之儀不苦候哉と同所

御目附より伺有之候付不苦段及達候事

嘉永二年七月廿六日

学校方帳ニアリ

一 川尻御加子高橋逸次忬出榭何程ニ可有之哉と

田中甚兵衛 劍術 問合忬者無苗之者ニ付 出榭者

師役也

難相成段及返答候事

同五年九月十日 医学寮帳ニアリ

一 医業之輩子弟共物髪又ハ剃髪ニ而武藝稽古いたし出榭并藝術ニ付

被賞等之見合可有之哉と鶴崎御番代付物書根取高崎新八郎より問合機局承合

稽古いたし候儀者不苦候へ共出榭ハ難相成尤藝術ニ付被賞等之見合ハ無之段及返答

候事

御入諸達

(付札)

「当時辛嶋才藏儀ハ着座ニ付

殿ノ文字等

文面〇斟酌可有之事也」

教授助教也

一 辛嶋才藏殿

助教

大城準太殿

近藤英助殿

学校方

御奉行中

御用人より申来候

趣ニ応認候儀

勿論ニ候

明日何時之御供揃ニ而講堂江被為入

入 定日之講釈被 仰付旨

諸生講釈并臨時読一部読背誦席書被 仰付旨

被

仰出候条例之通可有御心得候以上

榭江被為入候節者

入 定日之講釈被 仰付

相濟候上榭江被為

諸生講釈被 仰付

入明日榭之内幾師役被遊  
御覽旨被

(付札)

「可被有之御心得候儀御座候  
可有之御心得候 御物頭判」

仰出候条例之通可有御心得候以上

一 学校  
御目附衆中

学校方  
御奉行中

明日何時之御供揃二而講堂江被為  
入 定日之講釈被 仰付旨 被

諸生講釈被 仰付旨

仰出候条例之通可有御心得候尤

東門より被遊

御往来筈候以上

榭江被為入候節ハ

入 定日之講釈被 仰付諸生 相濟候上榭江  
講釈被 仰付

被為

幾

入明日榭之内上師役被遊

御覽旨被

仰出候条例之通可有御心得候尤

東門より

御入南門より被遊

御帰座筈二候以上

一月番御備頭也

八ノ日ニ而候得者  
不及達

御奉行中

明日何時之御供揃ニ而講堂江被為

入定日之講積被仰付旨被

仰出候此段申達候条月番之御番頭

江茂可被成御達候以上

一御留守居大頭也

学校方

御奉行中

何之何某殿

八ノ日ニ而候得者  
右同断

右同文此段申達候条御留守居

御番頭江茂可被成御達候以上

一月番御使番也

学校方

御奉行中

右同文此段為御存知申達候以上

一步御小姓組脇等之達此所ニ入筈

一三ノ日八ノ日

御入至御当朝御延引被

仰出候得者左之通

文政六年二月

御入帳

一 学校  
御目附衆中  
今日之講堂  
御入御延引被  
仰出候条左様御心得御備頭。江茂  
可有御申達候以上  
八之日ニ而候得者御備頭  
以下之文省キ御使番  
等江可有御通達と  
認候也

以下  
御奉行中

一 八月後火術試之儀已前より群原火矢

定町場之外者難叶究候処例年七月中ニ

相濟兼候面々於諸所試業願出有之

無用之手数ニも候間成丈ケ七月中ニ

相濟候様若相殘候分者群原ニ治定ニ

相成弁利之場所を願出無之候様天保七年

七月財津善内ナリ御用人より申来候付

ナリ

炮術師役中并村井多治満

三嶋流船軍師役ニ而

附属之炮火術矢玉之

小野又兵衛 岩戸新伝流 江及達置候処嘉永四年

火術引廻也

八月財津勝之助 村井多治満より 門弟群原定町場



三代目師役也

之内ニ而相凶打方有之筈之処同所之儀者

差障り有之候付五町手永山室村懸りニ而

打方いたし度段猶達有之候付御用人江

及問合候処弥以八月ニ入候間者氣候之

遅速場所之遠近ニ無係郡原之外は

難被叶段右天保七年規定被

仰付置候趣を以申来候儀委ク者天保七年

嘉永四年諸師役願扣ニ記有之候事

但本文之通ニ付已来八月後定町場之外ニ而相凶

揚方之儀者願出有之候而も其節々御用人打合せ手数ニ

不及願書差返候筈と申談相究候事

一 嘉永三年十月 夕樹 御取寄一件帳ニ記録アリ

一 夕樹御取寄 御覽之節父兄御禮之儀者師範々々より

引取御禮申上相濟候事

一 右同断

一 右同陪臣罷出候節主人々々御禮之儀者自身

又者一類之内御用番宅江被罷出筈候

尤御留守居大頭以上者御用番宅江使者

被指出候儀茂有之候事

一 慶應元年

一 御日柄ニ炮術稽古之儀

公儀并  
御自分方之御征月迄遠慮之見合  
に而候処前条  
御日柄たり共向後大小砲稽古遠慮二  
不及候

一 御代々様并

御婦人様方御年回御法会之節  
諸事相慎火用心等弥入念候様  
御触有之節茂右同断稽古遠慮二  
不及候  
右之通此節僉議ニよつて相究  
候事

五月廿八日

機密間

覚

慶應元年

文武御倡之儀付而別紙之通今日  
御直ニ被為在

御沙汰候条左様可被相心得候以上  
閏五月十一日

人 材 乏 候 而 者 国 家 隆 盛 二 至 兼 候 二 付  
文 武 倡 之 儀 澄 之 助 良 之 助 江 申 付 置  
候 得 共 其 方 共 儀 茂 乍 太 儀 右 両 人 及  
家 老 中 老 申 談 一 統 猶 更 文 武 相 励  
士 風 一 新 いたし 候 様 世 話 有 之 度 候

長 岡 内 膳  
長 岡 刑 部

平成二十年十月一日 発行

監修 川口恭子（熊本大学客員教授）

翻刻 熊本大学附属図書館古文書勉強会

データ入力・編集 永村典子（熊本大学附属図書館利用相談担当）

発行 熊本大学附属図書館